

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 2 月 29 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 市原伸恒 職位： 准教授

役 職：

I ティーチャング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学科基礎獣医学系の教員として、獣医学科 1,2 年次の獣医解剖学分野に関する教育活動を中心に行っている。科目としては獣医学科 1 年次の【獣医解剖学Ⅰ】及び【獣医解剖学Ⅱ】を担当しており、加えて、獣医学科 2 年次の【獣医解剖学実習】や、アドバンス講義科目である【臨床解剖学】などの実習・講義科目の分担、【獣医学特論】のゼミ活動及び【卒業論文】作成の指導を行っている。大学院では、獣医学専攻の科目である【獣医解剖学特論】および【獣医解剖学特別演習】を担当している。これらの授業を行い、解剖学分野の専門知識を教授する中で、どのような職域に進んだ際にも、獣医師として高度な専門職業人としての実践力を発揮できる人材の育成を行うことが、教員としての責務であると考えている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医解剖学Ⅰ	獣医学科	必修	1 年次	182
獣医解剖学Ⅱ	獣医学科	必修	1 年次	176
獣医解剖学実習	獣医学科	必修	2 年次	147
臨床解剖学	獣医学科	選択	4 年次	77
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6 次次	1
卒業論文	獣医学科	必修	6 年次	1
獣医解剖学特論	獣医学専攻	選択	1 年次	2
獣医解剖学特別演習Ⅲ	獣医学専攻	選択	3 年次	1

2. 教育の理念（育てたい学生像、あり方、信念）

獣医学教育とは、学修すべき科目の内容が、個々に独立したものでなく、すなわち、1 つの科目の履修を終えれば、その科目の内容に関する学習が完結するものではなく、体系づけられた教育、言い換えれば、重複する内容を含む科目の、順次性をもった学修成果の積み重ねにより成立するものと考えている。低学年での学びが、上位学年に配当されている科目の深い理解につながるため、低学年の科目である獣医解剖学分野の教育では、6 年間におよぶ獣医学教育を受けるための、確実な基礎固めが重要であることを常に念頭に置いている。獣医解剖学分野を中心とした低学年の学生教育を通して、高学年の授業を受講する際の学習効果をより高いものにすること及び獣医師国家試験に合格する学力を教授することに加

え、表面的な文言の暗記だけにとどまらず、履修内容に、多方面からの視点（例えば、肉眼解剖学的な視点だけでなく、系統発生学的な視点や、機能的な視点など）を交え、本質的に理解させる教育を行うことで、実践力の高い、問題解決能力のある人材の育成を目指している。さらに、卒業後の社会活動においても、まずは基礎や基本となることを十分踏まえた上で、より高度なことを実践するという考え方を身に付けた人材の育成を目指している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

2. で示した教育の理念を実現するためには、教員自身が、担当する授業の履修内容と、高学年での科目の履修内容との関係を常に把握していることが重要であると考えている。特に高学年での科目の履修内容は、新しい知見や技術の進歩により変化するものが多いことに留意している。獣医解剖学分野の授業内容に関わるような高学年の科目の教科書や、獣医療に関する新しい知見や最新技術に関する記載のある書物や文献を精読することで、獣医解剖学分野の授業内容が、高学年で学ぶ科目の中で、どういう位置付けがされていて、何が重要視されているかを確認して、その内容を授業に組み込むことを心掛けている。低学年で学ぶ履修内容と高学年で学ぶ履修内容の関連を授業内で紹介して、理解させることで、基礎的な知識の積み重ねが、より高度なものごとの理解につながることや、幅広い視点をもつことの重要性を説く結果を導くと考えている。また、獣医師国家試験の出題傾向を踏まえ、頻出項目について、授業内で獣医師国家試験の過去問題を示しつつ、重点的に教育を行うことの取組を行っている。重要視している点は、ややもすると単に知識を頭に入れるだけの作業になりがちな解剖学教育において、意識して、図や写真を多用することで、二次元的な理解から、三次元的、すなわち立体的な構造のイメージにつながるような工夫をして、単なる記憶だけでなく、なぜ、そのような構造なのかということを理解させることで、応用力をもたせるような教育を実施することである。また、高校で生物を履修していない学生を意識して、高校の生物の履修内容も振り返りつつ、授業を行っている。高校の授業内容については、既に履修済みの学生もいるため、単に高校の生物の知識の振り返りだけでなく、高校の生物をもとにした獣医解剖学教育を展開して、続けて上位学年での履修内容を関連付けて紹介することで、高校で生物を履修した学生にも興味をもたせることを心掛けている。

アクティブラーニングについての取組

単位数内の限られた時間で、教員-学生間のディスカッションや学生間のグループワークなどを行う時間を確保することができず、今後の課題であると考えている。

ICT の教育への活用

ICT の教育への活用については、Learning Management System (LMS) である學理を用いた教材配布や課題提出を行い、また、授業を録画して作製した授業動画を復習教材として配信した。加えて獣医解剖学講義では、ドリル機能を有する実践の試験機能を活用するこ

とで、学生自身による理解度チェックの実施や授業内容の重要項目の再確認を行える環境を整備した。また、総合獣医学では、獣医解剖学講義と同様に実践を用いて、獣医師国家試験に向けての基礎的学力の確認チェックの場を提供することで、インターネットが使用できる環境であれば、いつでも、どこでも国家試験対策の学習ができる環境を整備した。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① 教育（授業，実習）の創意工夫（A）

履修生の好奇心をそそるような内容（例えば、動物に関わることで、日々、目にしていることや、遭遇するような事案など）や、また、高学年でも役立つような臨床的な事項を交えた授業を、意識して行った。また、教科書以外の図や写真を、可能な限り、多く使用するように心がけ、履修生が履修内容（動物体内の構造）を、立体的にイメージしやすいような工夫をした。授業スライドでは、努めて、文字サイズが 48pt 以上の大きな文字を使用することで見やすくしたこと、1 枚のスライドの内容量を少なめにしたこと、履修生の集中力を高め、理解を深める工夫をした。配布プリントの作成時には、行間を広くすることで、メモを記入しやすい工夫をした。授業の際には、特に重要な事項については、繰り返し（反復して）伝えるように心掛けた。

② 学生の理解度の把握（B）

実践：試験機能を用いた理解度チェックを実施しているが、義務付けては無く、また、成績評価に加えていない。そのため、実践を活用しない一部の学生の理解度の把握には至っていない。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（A）

実践：試験機能を用いて、毎回の授業後に、授業内容に沿った問題を設定することで、学生自身による理解度チェックができるようにして、自学自習を促した。また、オリエンテーション時には、授業内容の理解が難しい際に、履修生が自学自習しやすい、教科書よりも平易な書物を、複数、紹介して、活用を促した。

④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

メールでの対応や、研究室に来室しての対応など、履修生が望む方法で対応できるようにして、コミュニケーションをはかった。

⑤ 双方向授業への工夫（B）

獣医学科 1 年次前期の授業【獣医解剖学Ⅰ】では、出席カード（紙）を配布して、授業内容に関する質問や、入学して間もないことを踏まえ、受講に際して困っている点などを書

いてもらい、授業の進行に役立てた。

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

担当している主要な必修科目(獣医師国家試験に出題される分野)の配当学年が初年次(1年次)ではあるが、授業内で、授業内容に関わる獣医師国家試験の過去問題を示し、獣医師国家試験の頻出問題であることを紹介するなどして、低学年から獣医師国家試験に対する意識付けを行った。また、6年次後期配当の総合獣医学を分担して、獣医解剖学の頻出ポイントや重要項目の紹介を行った。加えて、授業を補う意味で、実践：試験を設定して、基礎的事項の確認チェックを行える環境を整備した。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

これまでの授業評価アンケートでは高評価を得ていたので、基本的には昨年度までの授業方法を継続して行った。2022年度の授業評価アンケートで寄せられた意見のうち、改善の必要があると考えられたものは、1)授業の進み方が早い、2)どこまで覚えればよいのかが分からない、の2点であった。1)については可能な限り、メモを取る時間に余裕が出るように間を取るようにした。2)については、どこが重要かのポイントについて、これまで以上に明確に伝えるように留意した。

② ①の結果はどうでしたか。

履修生からの同様な意見は届いていない。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

これまでのように良い評価を得られるように、同様な授業方法を行いたいと考えている。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

日々の学習において、学生自身が履修内容の理解度を把握することが困難であることを踏まえ、到達目標に達しているかを自己診断するために、実践：試験機能を活用して、履修者の学習ペースに応じて、理解度チェックの試験をいつでも、どこでも使用できるように設定している。引き続き、この取組を行うが、成績向上につながるような実践：試験機能の活用方法について再考して、必要に応じて、実施方法を改良していくことについて検討することを考えている。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

実践：試験機能を活用した理解度チェックに関して、最終成績との結びつきが明らかにできていないが、これまでの授業評価アンケートでは、実践：試験機能の活用は評価を得ており、一定の成果は上がっているものと考えている。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

授業改善につながる FD 研修会は配信動画視聴も含めて参加している。また、インターネットで得られる情報をもとに、他大学の教員が実施している指導力向上のための取組を積極的に導入することを意識している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

獣医事における最新の情報の把握に努め、これらの情報を交えた教育を行うことで、短期的には今後の学修に、長期的には卒後の社会活動にどのように結びつくのかを理解させた上で、基礎的な知識の重要性を説き、問題解決能力のある人物の育成を目指した教育を展開していくことを目標として教育活動を遂行していきたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、授業評価アンケート、學理や実践、授業で用いた配布資料、スライド資料及び配信した授業動画、学生から寄せられた質問に対応したメール、配信動画視聴も含めた FD 研修会の参加記録（受講後のアンケート提出）